

西府土記

楊吟

首の乃一らあひの氣れ
あひあひ一らあひの氣れ
小報のあひあひの氣れ
あひあひの氣れ
あひあひの氣れ
あひあひの氣れ
あひあひの氣れ
あひあひの氣れ
あひあひの氣れ
あひあひの氣れ

意詠

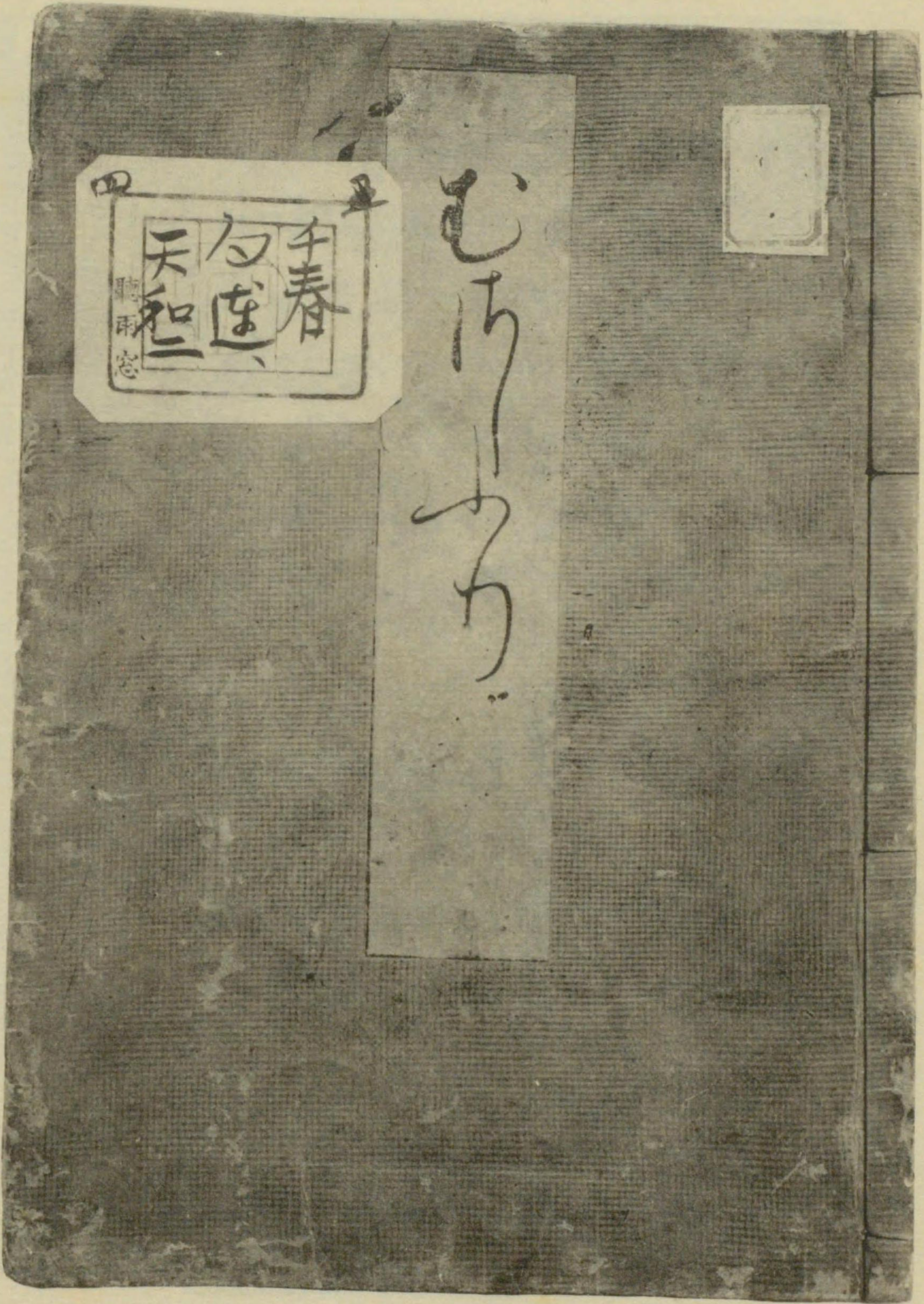
花のあひあひの氣れ
あひあひの氣れ
あひあひの氣れ
あひあひの氣れ
あひあひの氣れ
あひあひの氣れ
あひあひの氣れ
あひあひの氣れ
あひあひの氣れ
あひあひの氣れ

あひあひの氣れ
あひあひの氣れ
あひあひの氣れ
あひあひの氣れ
あひあひの氣れ
あひあひの氣れ
あひあひの氣れ
あひあひの氣れ
あひあひの氣れ
あひあひの氣れ



太向殺第一
野村男部詩

物は口を以て其の味を知る
如く人は心で其の徳を知る
國は民を以て其の強を知る
如く家は人を以て其の富を知る
如く人は徳を以て其の尊を知る
如く人は徳を以て其の尊を知る
如く人は徳を以て其の尊を知る
如く人は徳を以て其の尊を知る



心ゆくまで

春
白
天
和

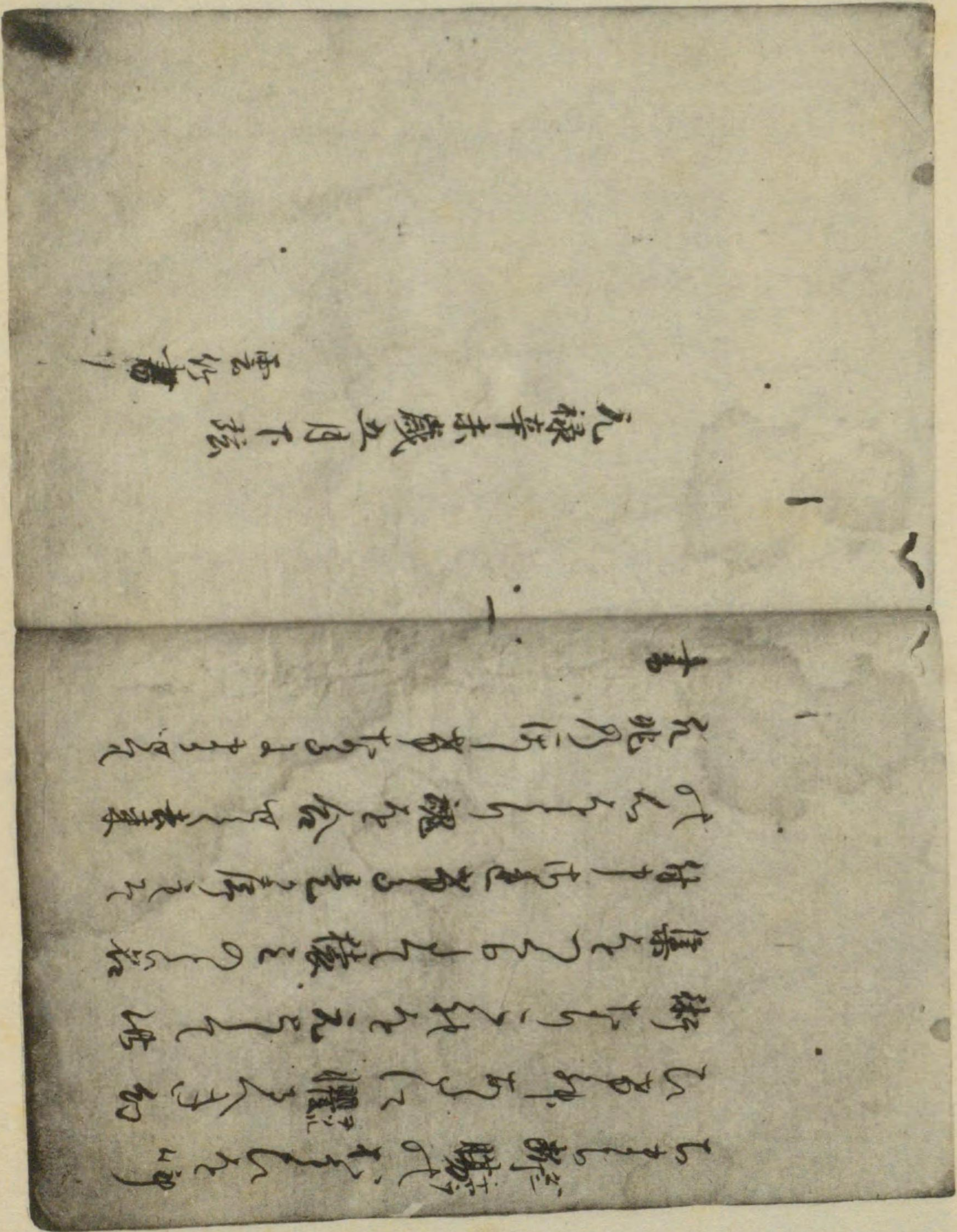
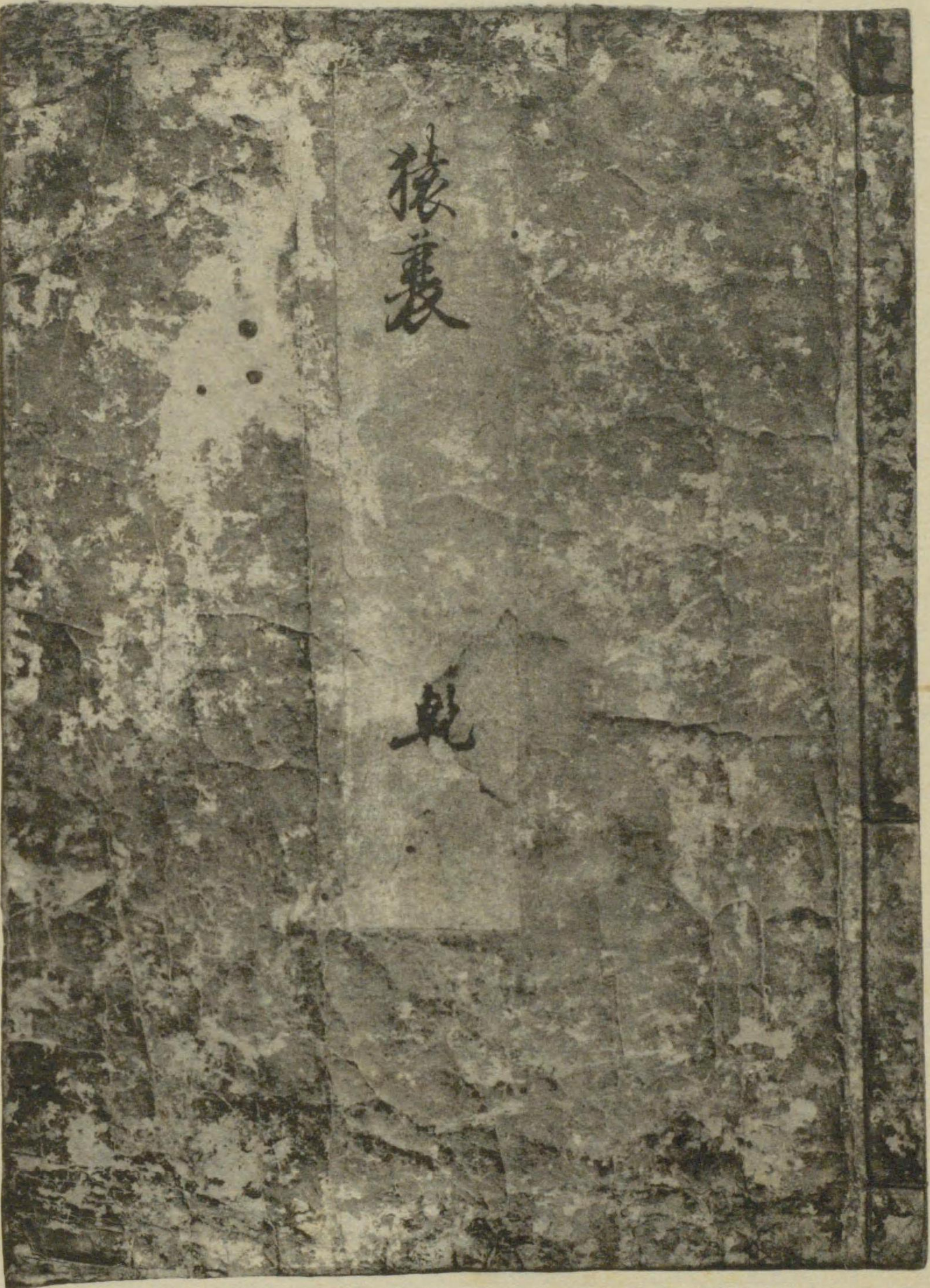
梅柳心若繁茂 女凡桃青
松は竹の葉をよび比 杉風
櫻の一角の鹿の間 日三翠
酒のまじ芝蘭分入るまじ似春
芝乃在好白奥嘆羨之 四友

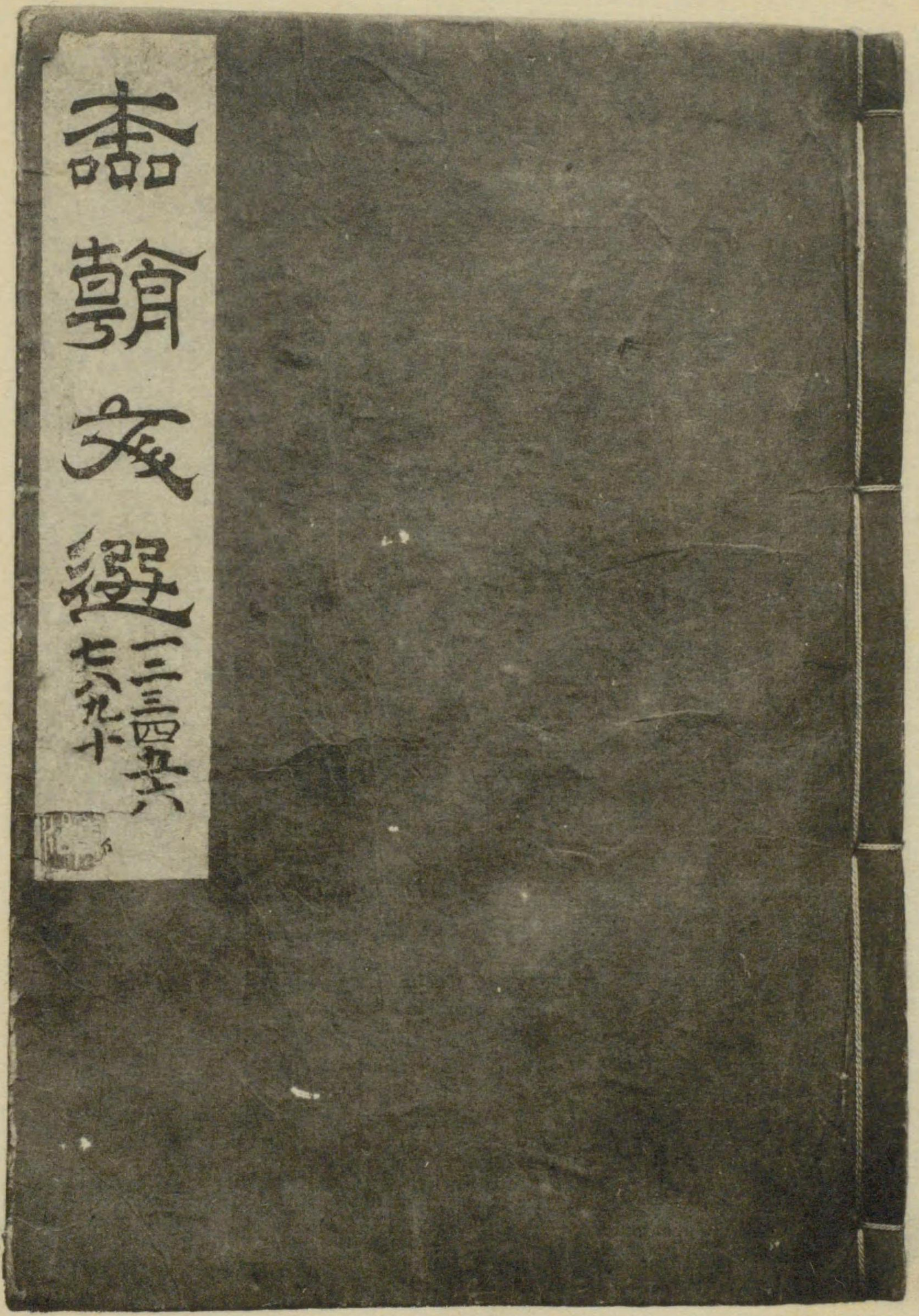
芭蕉翁

武彦曲 春

乃同志乃吟友とて
可重なる心あり 中は序
是二心あり 彼上は心あり
了百痛圓心京中日本重し
中知里心あり 心あり
辞せし天和二年二月 離散の
罪乃時綿愔のまじり 爲素
如也如







書翰文選 三十四卷 六十九

Handwritten text in vertical columns, including a section header '返店文' (Kaitemon) and '路通' (Ritchu). The text appears to be a collection of letters or documents.

新花伝子

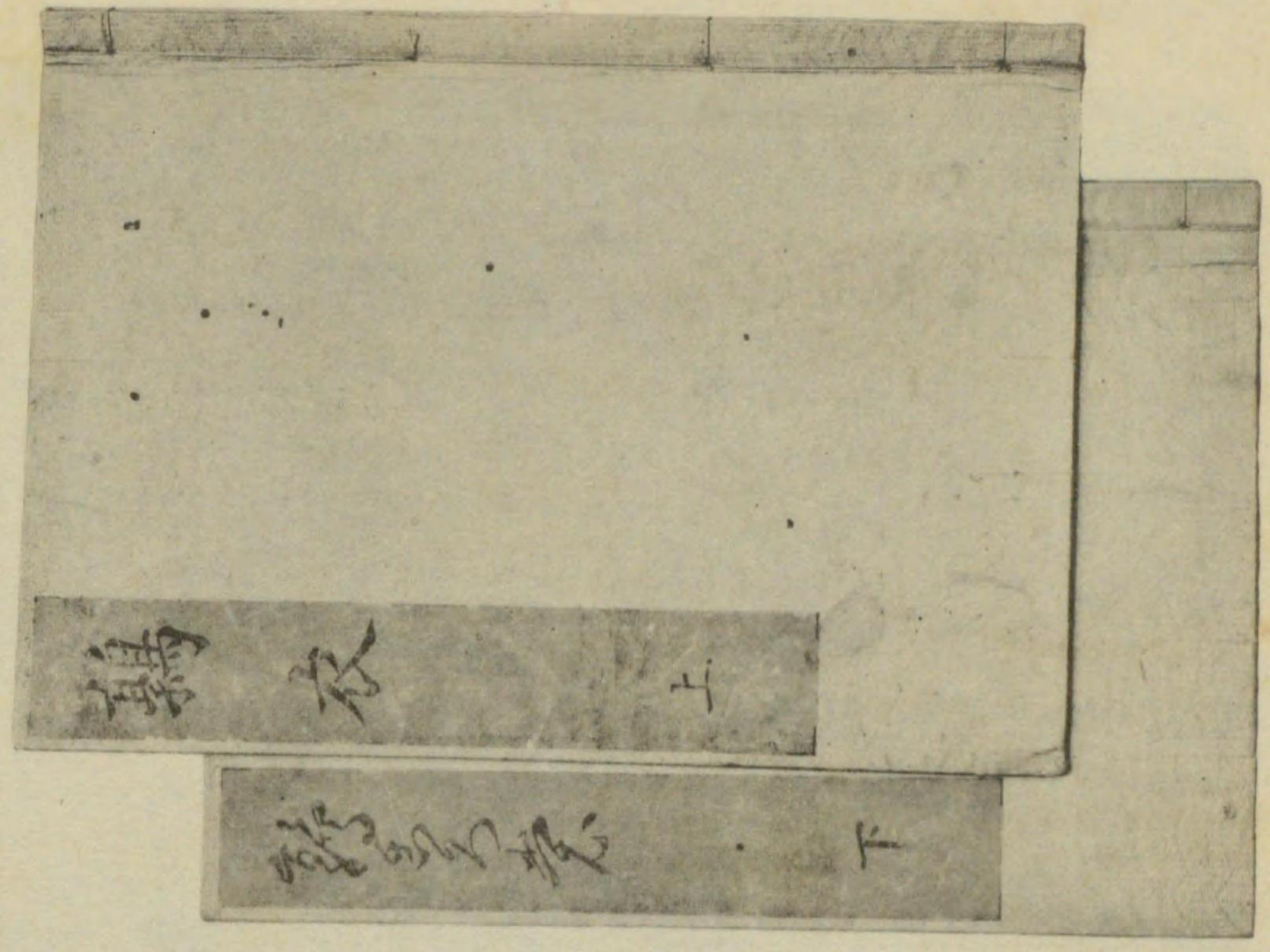
八日

新花伝子

灌佛やうしを腹ハかりのやと
 卯月八日死し生も子を佛
 更衣方にしてら落のそめか
 小原元母形之藤原氏しる茶
 かし子も二子よむ抱女中ゆさる
 身も子父入及しおやうま子
 小原女も其くあそいあそこの子
 更衣と大洲の里人ゆし

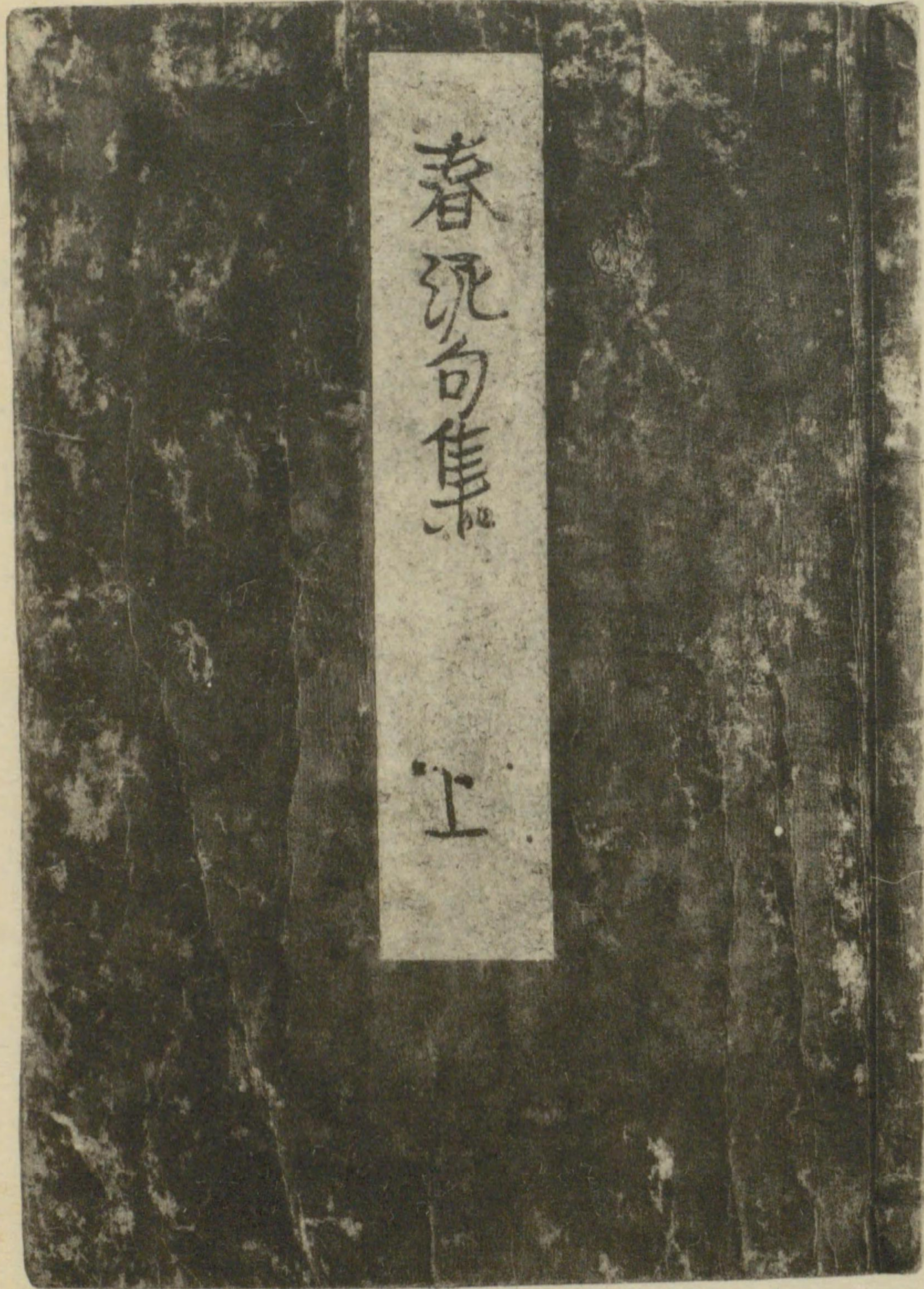
11011

11011



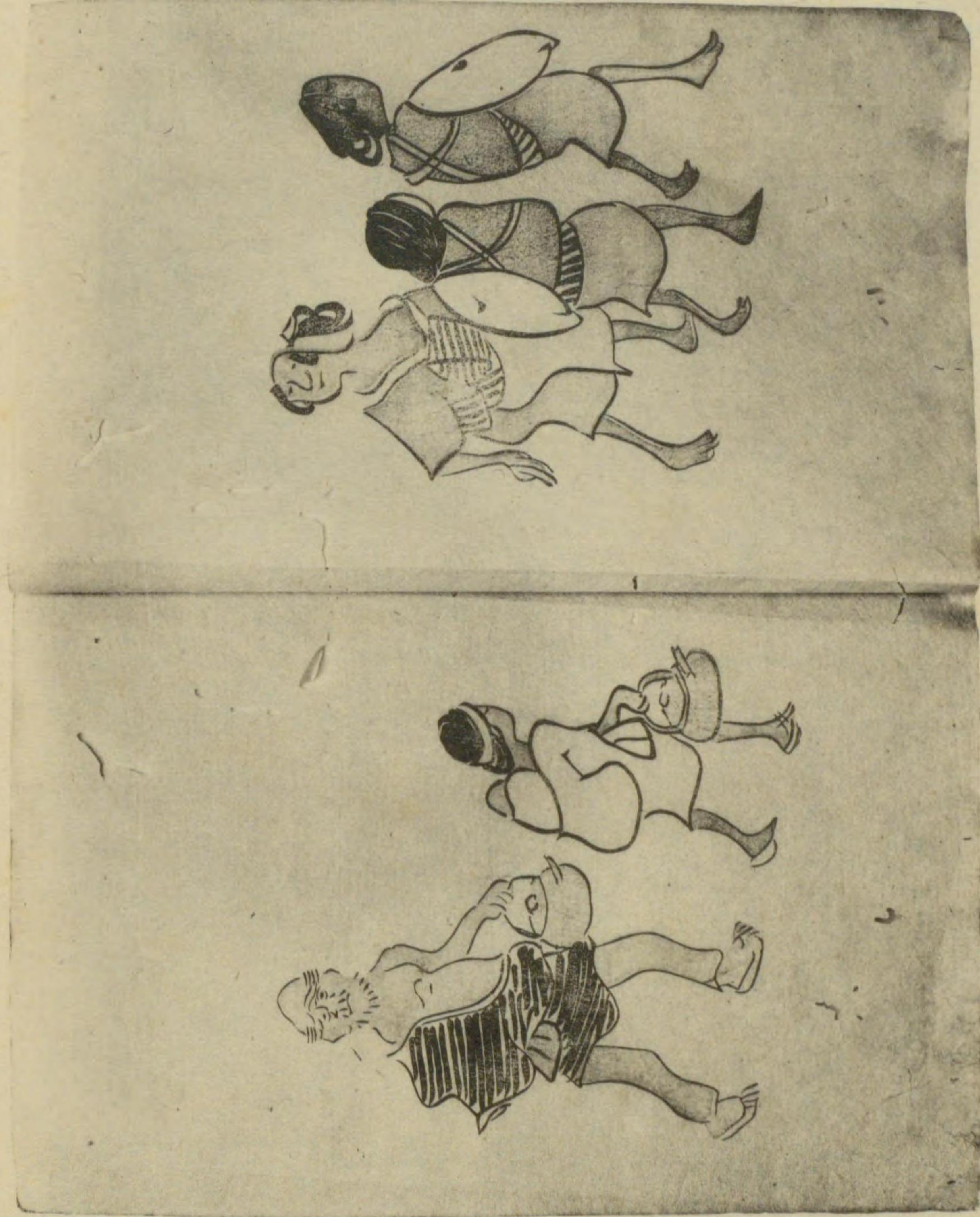
書
 林

京新町二条上
 西村平八
 大坂心齋橋筋順慶寺
 柏原屋清右衛門
 尾州名古屋本町丁目
 風月堂孫助
 江戸本町三丁目
 西村源六
 同本町筋北八丁目通津町
 葛屋重三郎板



248

1104



247

1101



佛のたよりをうける羊に類をへら
 たりふと必宿下る夜半真に枕へ
 六十二歳林無村書

時安永丁酉冬十二月七日

春泥發句選
 春之部
 元旦
 こころに花乃を
 けと花の味とを水の槽
 ちとを舞う花の一さす
 春袍着し酢漬出さす
 等持院寓居の頃
 へらふおのちの春白

文化九年四月末由小倉
著書此作はては路り
御し中水手舟中作
浮き舟のち舟中書

世宗三郎景光
印



此のめりは王宮の女川を流
れし水手舟中作
御し中水手舟中作
浮き舟のち舟中書

あり林木あり海路何事原野とて
いふもそのまに流るる水に
り舟り是あり上まの源のそに
木せり舟中作
御し中水手舟中作
浮き舟のち舟中書

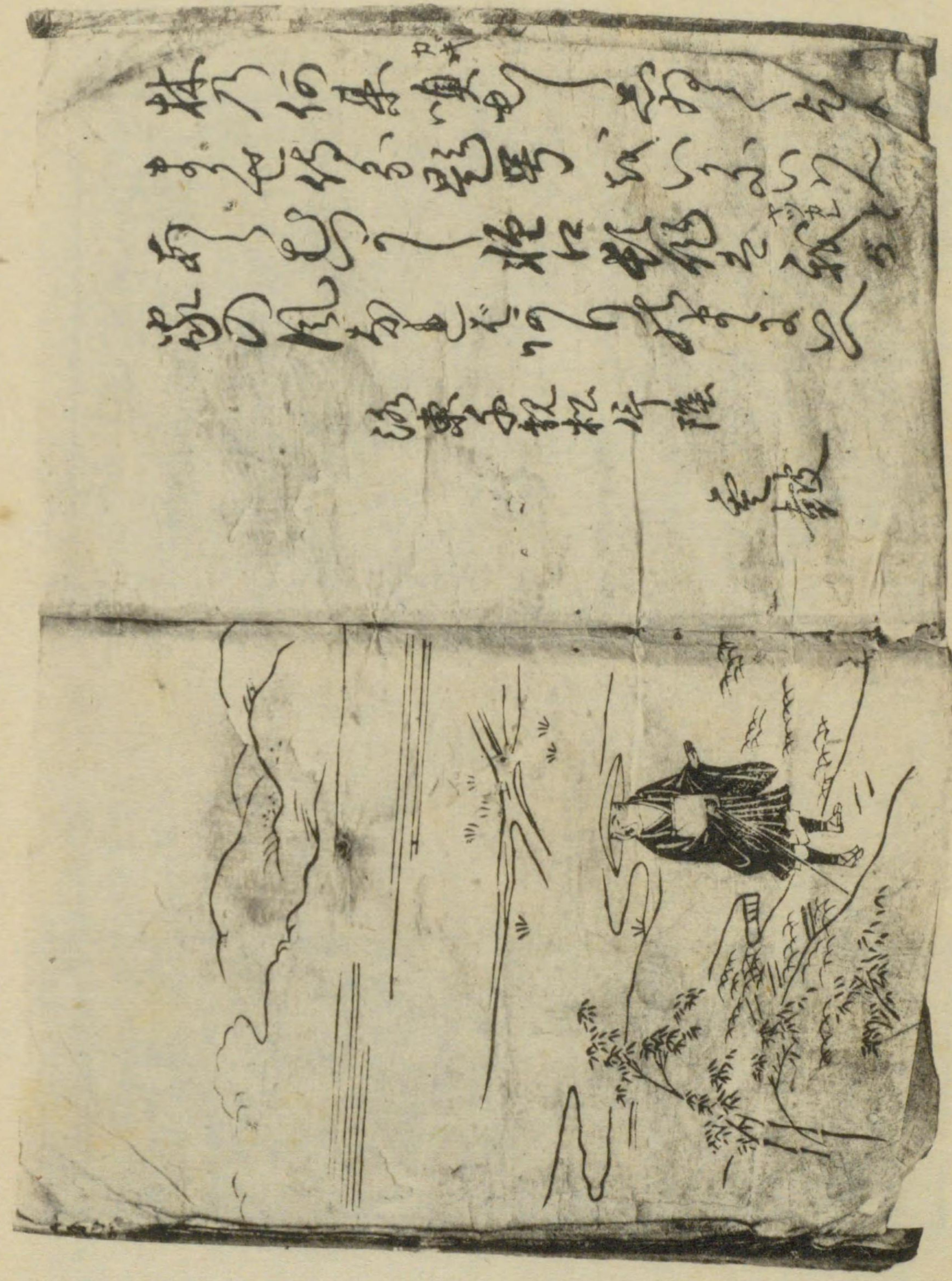
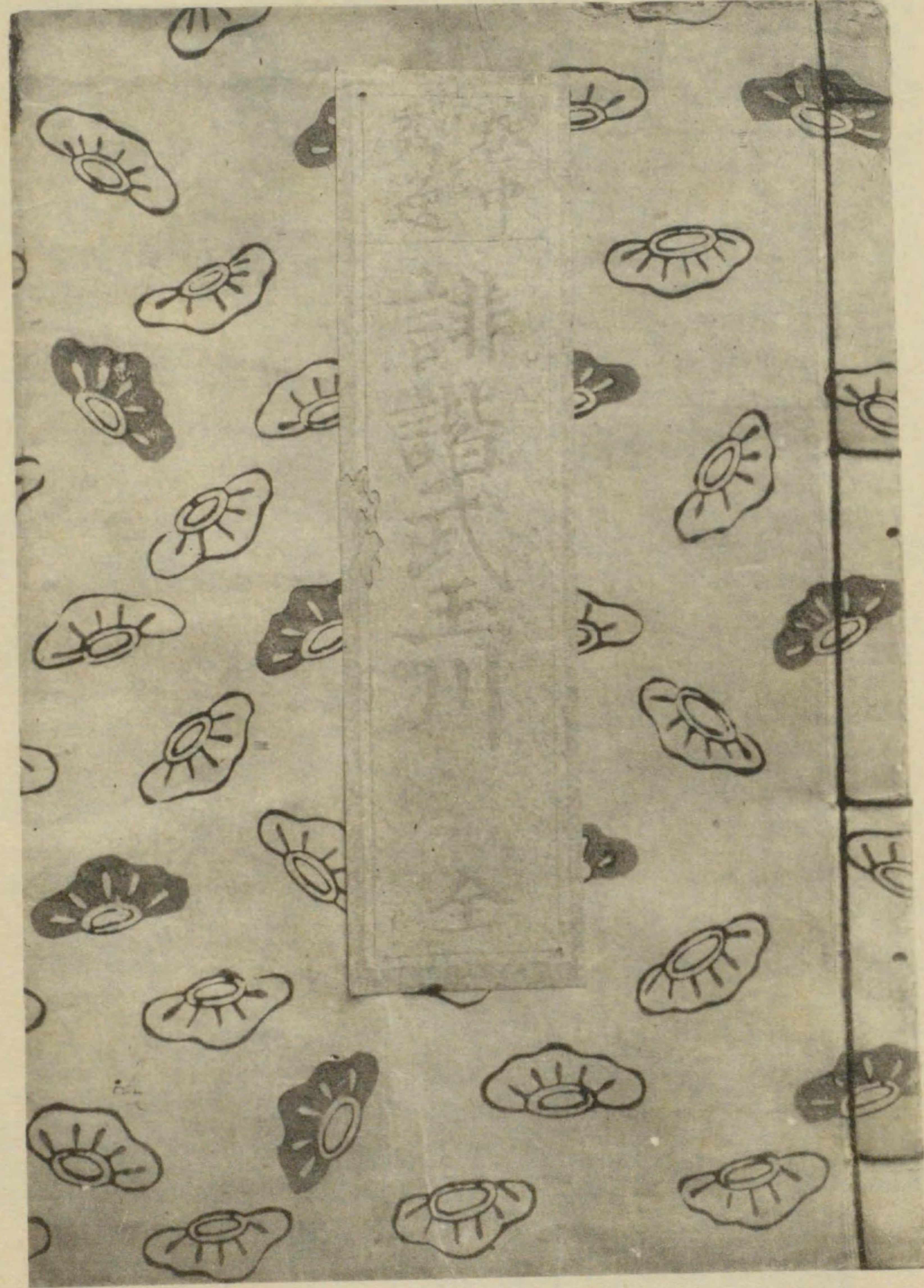
咲や木乃花

振別浪屋前向長長抜粹

花向何勢乃花油とりと先
貴山妙向とてめと花云
お違乃りてはてはひもさ
それくも花のひもさ
花向と表振一指振小なり
いむ程小もそりいもさ
花向木向何んそと又われ
かくりかかともさるる
まらへは花の葉に續探
下下ひるる花向ん

▲かろるる花のひもさ
花向のひもさ
花向のひもさ
花向のひもさ
花向のひもさ
花向のひもさ
花向のひもさ
花向のひもさ
花向のひもさ
花向のひもさ

花向のひもさ
花向のひもさ
花向のひもさ
花向のひもさ
花向のひもさ
花向のひもさ
花向のひもさ
花向のひもさ
花向のひもさ
花向のひもさ



新撰歌奇集卷上

春

小野色のさややへきよりてよみ

前大工戸羽伝

はるか乃ららに白ふとらんし梅花

まのさけ一川まねたるに



さやの女房ぬし

つかれうらに白ひし梅も交りし





Handwritten text in two columns, likely bleed-through from the reverse side of the page. The text is written in a cursive style and includes several lines of characters, some of which are partially obscured by the binding or the way the paper was folded.

太平樂府卷之一
 胡逸 滅方海 著
 惠萊 安陸羅 校
 五言古詩
 呈畏雷上人
 降雹澍大雨輾出雷霆音更視氣色
 冷忽無生居心遙達二階下唯賴御

明和己丑八月
 北山業寂僧都序


 北山山房

本丁文醉卷之一五言古
 二街 腹唐槐人 編選
 魚岸 邊越方人 全校
 蓬萊島臺
 飾置蓬萊臺細工悉為經竹立七賢
 傍松貫大夫爵白沙浦島龜青天賴
 朝鶴皆謳高砂謠延壽日出度枝榮

之才之美兼和漢亦猶妍
 妹稱一對乎
 天明乙巳秋七月
 四方山人題



新書
 公致
 遠國
 未正
 後家
 子家
 日家
 時家
 心家

尾陽名越
 芦邊田鶴丸
 驚世一東韻
 紀安丸
 起歲坊
 條野玉浦
 豆永金成

今頃城町亦然因比並而稱之或設隱名
 曰山鳥或用真讀曰多宇計武屬者有
 事者者嶋原中頃城之名而各評判之且
 詠狂歌其數餘于五十其部分于二箇
 部者載大夫之名蓋松者被封于大大
 梅部者載天神之名蓋梅者被愛于天神
 世名曰桃源集矣予雖未親彼地聞于世
 人且考彼集而略知其風體暇日本十彼
 集所書之次第而各作五言絕句之狂詩
 且寓名字于句頭句中與狂歌并書而行
 于世後覽之人改而正之幸甚
 承未之春抽毫于虛白堂
 躬田鈍太郎末孫白面書生

今頃城町亦然因比並而稱之或設隱名
 曰山鳥或用真讀曰多宇計武屬者有
 事者者嶋原中頃城之名而各評判之且
 詠狂歌其數餘于五十其部分于二箇
 部者載大夫之名蓋松者被封于大大
 梅部者載天神之名蓋梅者被愛于天神
 世名曰桃源集矣予雖未親彼地聞于世
 人且考彼集而略知其風體暇日本十彼
 集所書之次第而各作五言絕句之狂詩
 且寓名字于句頭句中與狂歌并書而行
 于世後覽之人改而正之幸甚
 承未之春抽毫于虛白堂
 躬田鈍太郎末孫白面書生

二三三

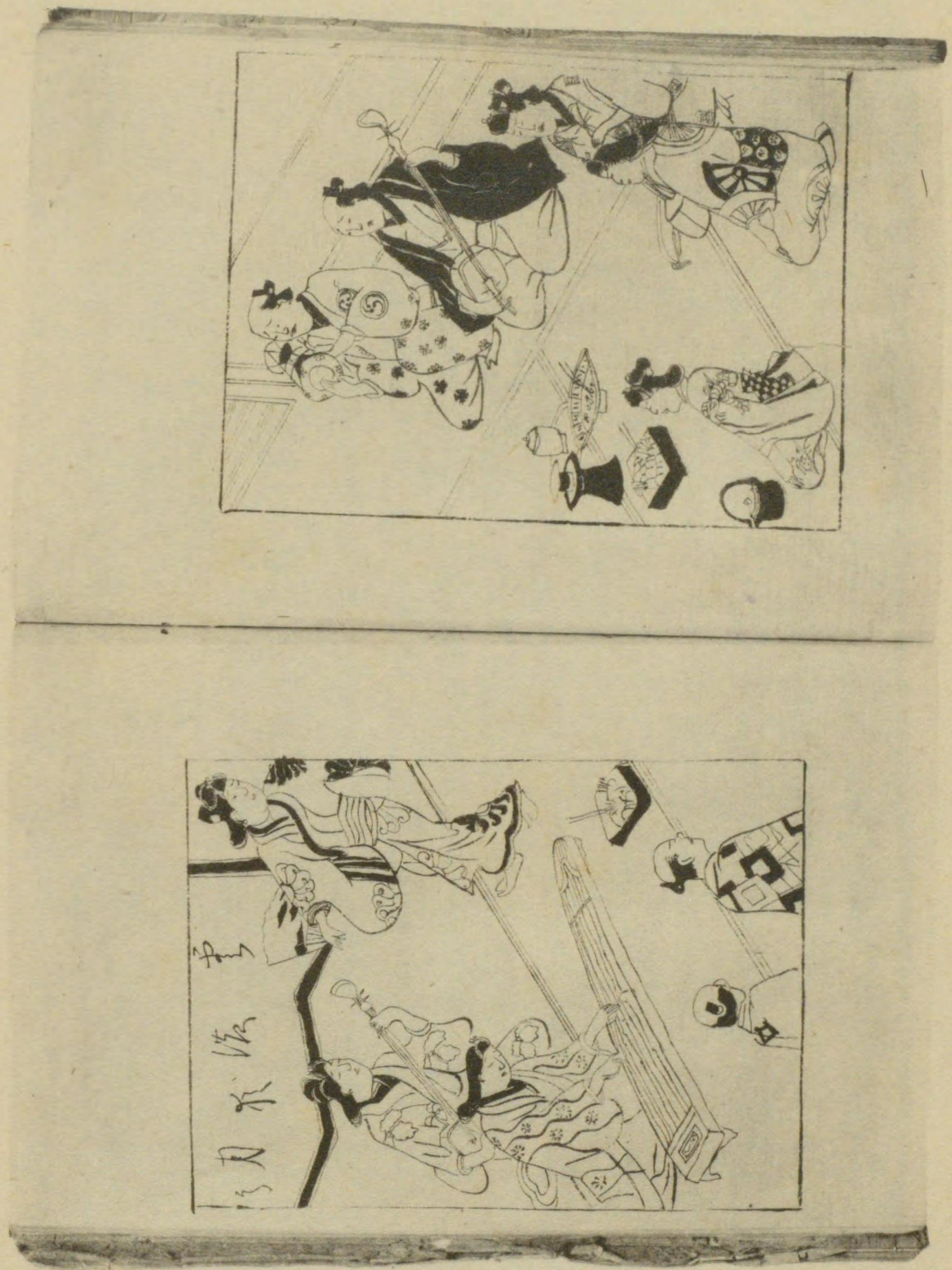
吾將知衆隊 藤氏乎源氏
 少少已焉致 交遊幾度金
 今合てゆん人母愛のほろひ

今頃城町亦然因比並而稱之或設隱名
 曰山鳥或用真讀曰多宇計武屬者有
 事者者嶋原中頃城之名而各評判之且
 詠狂歌其數餘于五十其部分于二箇
 部者載大夫之名蓋松者被封于大大
 梅部者載天神之名蓋梅者被愛于天神
 世名曰桃源集矣予雖未親彼地聞于世
 人且考彼集而略知其風體暇日本十彼
 集所書之次第而各作五言絕句之狂詩
 且寓名字于句頭句中與狂歌并書而行
 于世後覽之人改而正之幸甚
 承未之春抽毫于虛白堂
 躬田鈍太郎末孫白面書生

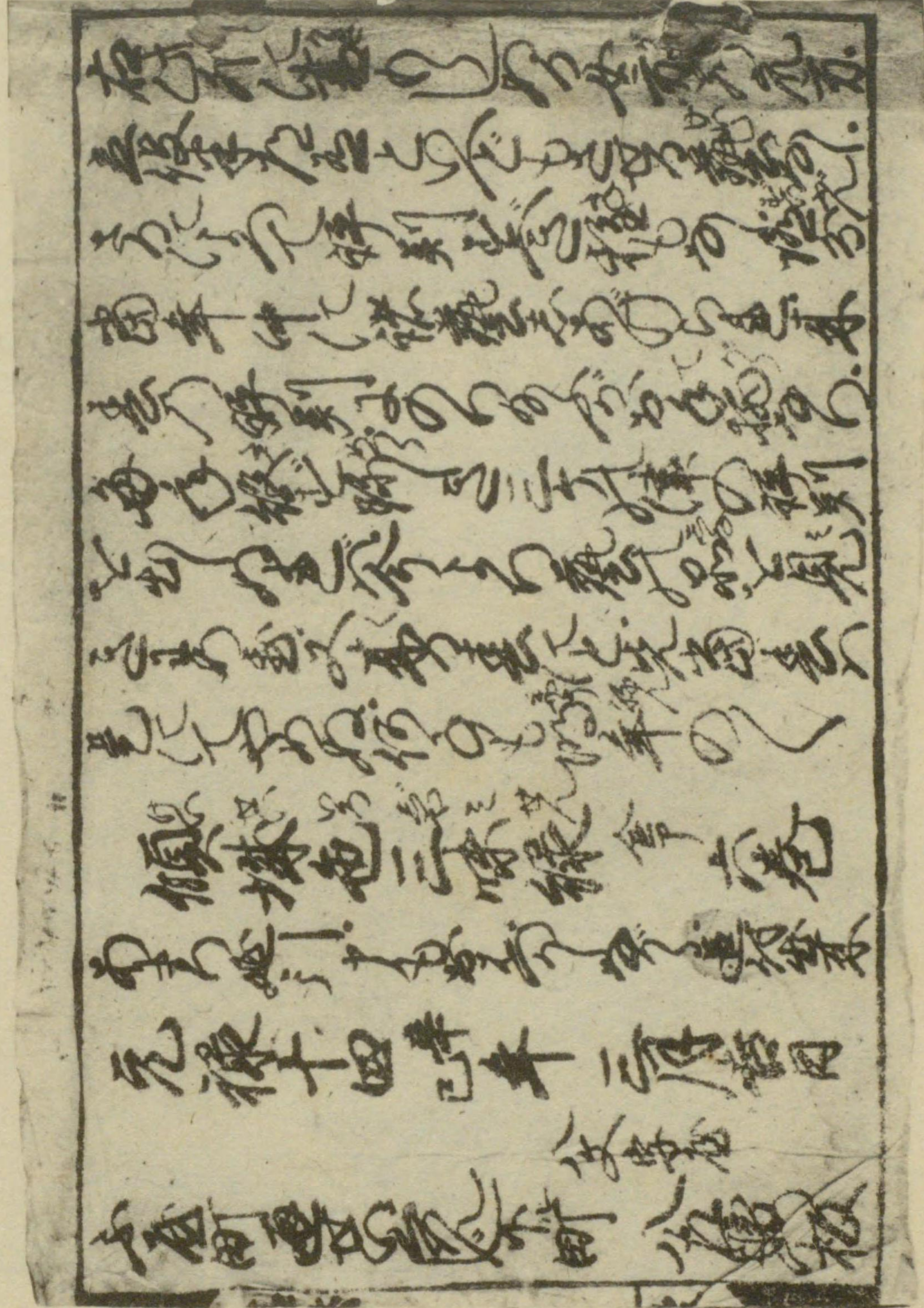
酒竹文庫

二三三

二所目古うり分
 東尾門 定部
 一画といふは西平の住居といふに九つをたてたる所
 ありんや也其のそとに最のりいありたり強利を
 あり
 ありありとて其の工師のいひのまこれ
 ありありとていふもささていふか
 同門 狭江



本圖録は三百部
印行せる限定版
本書はそのうち
第壹分番也



141
242

昭和五年一月十日印刷
昭和五年一月廿日發行

江戸文學圖録 (定價金貳拾圓)

編輯者 京都帝國大學內國文學會
津田青楓
裝幀意匠 南林次
木版彫刻 小林製版所
コロタイプ印刷 田中印刷出版株式會社
本文印刷 中村文光堂
製本者 會社ぐろりあそさえて
發行 伊藤長藏

複製
不許

代
表
者
伊藤長藏
神戸市前町十八番
京都市河原町三條南、蓬萊相互館

